

高雄きくえ編（インパクト出版会、2022年）

広島 爆心都市からあいだの都市へ

「ジェンダー×植民地主義 交差点としてのヒロシマ」連続講座論考集

宋 連玉*

本書は軍都から平和都市へと衣替えをした広島のポリティクスをジェンダーと植民地主義という複合的視点で見直そうとする22人による意欲的な論考集である。

1. 広島をめぐるポリティクスへの批判的考察

第1章「旧陸軍被服支廠とヒロシマの記憶 何のために残すか」、第3章「加納実紀代が語る、加納実紀代を語る」、第4章「『パーク・シティ』公園都市広島を語る」は、建造物はじめ「もの」として残された広島の記憶を検証する。第1章「爆心地の彫刻」は長崎「平和祈念像」がかつては戦争賛美した作家の作品だと明らかにする（小田原のどか）が、それは広島の旧被服支廠にもいえることで、建物の歴史的意義を不問にしたまま、観光資源として活用するか、老朽を理由に壊すかで議論されてきた（森田裕美）。切明千枝子は被服廠で働いた母の記憶から、軍服の防寒用に飼育されたウサギが毛皮を剥いだ後に職員たちのタンパク源になった事実を伝える。第3章では象徴がもつ政治性を考察する（加納実紀代）。戦前に「軍神」の象徴だった「鳩」はA級戦犯も合祀されている靖国神社では8月15日（1973年以来）に飛ばされ、広島原爆の日「平和祈念式典」では「平和」の象徴として位置づけられる。どのように折鶴も元来は病気快癒を祈る民間信仰が、被爆少女が折っていたことが「平和」と結びつき「唯一の被爆国」ナショナル・アイデンティティのアイコンとなった。かたや女性自衛官が少女に折鶴を教える姿が自衛官募集のポスターになっている。このような鳩と折鶴の相反する解釈を許す日本に対し、ノルウェーのヨハン・ガルトゥングは「日本人は憲法9条を安眠枕にしている」と批判する。

広島原爆被害を写した写真は不鮮明な5枚しか現存しないが、第4章で笹岡啓子は写されな

かった多くの存在を想起させる幻視や幻影が必要だとし、黒くて暗い写真シリーズ〈PARK CITY〉を制作する。柿木伸之はそれらがヒロシマのauraを剥ぎ取り、凝視と思考へ誘う批評性を示すと評価する一方で、平和資料記念館を中心に据えた広島の公園化は資本主義的産業としての「ダーク・ツーリズム」推進に繋がるとも警告する。

2. 植民地主義からみる広島とあいだの都市

ヘイトスピーチは主に民族マイノリティの在日朝鮮人に向けられる。第2章「在日朝鮮人女性史・生活史から学ぶ」（宋恵媛）は朝鮮人女性が「自らを肯定するための究極の行為」として残したライフライティングを博搜し、微かな声に耳を澄ます作業の記録である。第5章「広島の在日朝鮮人史を掘り起こすために」では在日朝鮮人三世の権鉉基が「〈広島・ジェンダー・在日〉資料室サゴリ（サゴリ＝朝鮮語で交差点の意）」設立のための資料収集過程で、広島県朝鮮人被爆者協議会や『広島の強制連行を調査する会』（1990）による調査活動の結果をまとめたものと、指紋押捺拒否運動に関する記録くらいしか残存しないことを明らかにする。安錦珠によると、戦時期の国策企業の労働力動員が大きな契機となった朝鮮人の広島移住は、敗戦後に『平和記念都市』の名分下に集住地区から立ち退きを迫られ、その後形成された朝鮮人町も減少の一途をたどる。敗戦後の一生業の養豚は環境整備対策で全廃（1972頃）され、県内にあった朝鮮人初級学校4校は1校しか残っていないところにも今日の植民地主義が窺える。

このような実態を日本社会はどのように認識してきたのか、それに応えるのが第7章「〈この世界の片隅に〉現象を読み解くためのレッスン」である。ノリ養殖を営む江波の漁民は軍拡大のために生きる場を追われ、やがて戦時下に動員された朝

* 青山学院大学名誉教授、文化センター・アリラン館長

鮮人の労働現場と変わった、いわば軍事主義の重層的な「暴力」の場である。漫画『この世界の片隅に』では、満洲へ追われた漁民、遊廓に売られた少女、敗戦時に「太極旗」（朝鮮の国旗）を掲揚して民族解放を喜ぶ朝鮮人などが断片的に描かれるが、TBSドラマ版では「太極旗」は消え、映画（2016）では遊廓の話がカットされる。漫画『この世界の片隅に』が人気を博した理由として、植松青児は日本社会の自慰的なノスタルジーと加害責任を認めない歴史修正主義の欲望が重なり、軍都・ジェンダー・植民地主義を脱着可能なモジュールとして「つまみ食い」したことを挙げる。森亜紀子も広島から南洋諸島まで「切り落とされてきた場所・出来事」の問いなおしから、作品が「植民地」問題を後景化したとみ、川口隆行もこの史代（原作者）が大田洋子著の小説『夕風の街と人』（1955）や山代巴編著のルポルタージュ『この世界の片隅で』（1965）のような優れた先行作品の文脈を自分の文脈にすり替え、ナショナルな欲望に沿ったためだと分析する。

3. 交差点としてのヒロシマが提起する思想的課題

第8章「広島で〈加害性〉を語るということ 植民地支配／戦争責任／戦後責任と被爆都市のあいだ」は、時空間を拡げて広島を再考する最終章である。阿部小涼は日本を「唯一の戦争被爆国」とすることは、被爆経験の拡がりや不均等性を矮小化し、省略する効果につながると戒め、道面雅量も広島原爆被害を「特殊の被害」とするのは原爆以外の空襲被災者たちの声を封じ込めるとする。植民地主義の起点を台湾割譲、朝鮮併合、琉球処分、北海道編入に遡るべきだとする河内美穂の指

摘も重要だ。中谷いずみは戯曲「父と暮せば」に描かれる個の物語を同時代に生じていたさまざまな事態や歴史的体験と交差するものとして捉えなければ、「慰安婦」サバイバーの証言は聞こえてこないと結ぶ。

第6章「セクシャル・マイノリティとフェミニズムの対話」は編者の高雄が「異なる入口から分け入る」ことで、植民地主義を支える近代家族イデオロギーを問うものである。性的少数者カップルが被る不利益から同性婚を求めるのに対し、堀江有里、高雄ともに対関係を当然視する近代的性規範そのものを問う。

編者の高雄は広島でサゴリを開き、そこに加納実紀代資料室を併設した。加納は「戦争体験記のなかの「女性体験」」（『昭和文学研究』1993）で、元兵士が記述した戦地での「恋愛」体験に対し、現地女性が二重に犯されていると批難したが、後には朝鮮人『慰安婦』と日本兵との「恋愛」を女性のエージェンシーと受けとめ（第3章平井和子）、朴裕河の『帝国の慰安婦』に共感する。高雄は女性の戦争責任を問うてきた加納と「記憶の女性化」という視点を示唆した米山リサを評価しているが、両者の思想的違いをどう受けとめているのか。加納の加害と被害の二重性は植民地主義批判に届いたのだろうか。これらの疑問も含め、本書が、「広島」から「軍都・ジェンダー・植民地主義」を批判的に考察し、交差性を深化させる契機となるようにサゴリを見守っていききたい。

参考文献

米山リサ, 2005, 『広島 記憶のポリティクス』岩波書店.